
° ?°) **の忘れられない恋物語のようです**

猫帽子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

。?。 の忘れられない恋物語のようです

【Nコード】

N6528E

【作者名】

猫帽子

【あらすじ】

ブーン系小説・7月7日の恋物語です。

雨音

ポツンポツン…

バケツに一滴ずつ溜まっていく雨の雫を少年はずっと見ていた。

「また会えないね。」

私はいきなり話しかけられたことに少し驚きながら、彼を見た。

「えっ？」

「織姫ちゃんと彦星くんの話。」

「あ…」

私はカレンダーを見て、今日が7月7日であることに気付いた。

そういえば、あの日の朝もこんな天気だったなあ…

2001年7月7日

「ツン、お留守番頼んだわよ。」

「うん。」

「じゃあ、ブーンくん、先行ってるわね。」

「はい。」

この日は、私の両親が私の家の居候であるブーンと彼の実家に行く日だった。

ブーンの両親と私の両親は高校時代からの友達でブーンの家の家計上居候となっていた。

私はブーンとは兄弟のような感じであったが、付き合っていた。

「ツン、寂しくなったらいつでも電話してきていいからお。」

「寂しくなんてならないもん。」

また私の嘘。

本当は離れたくなかった。

もしかしたら実家に帰ったまま戻ってこないかもしれないと思ったからだ。

でも、そう言ったあとの、ブーンのいじける表情が何よりも私を慰

めてくれた。

「ちよつとぐらひは寂しくなつて欲しいお…」

「なら、ちよつとだけ。」

私はブーンを抱きしめた。

「絶対、帰つてきてね。」

「うん」

ブーンを離すと、手を振った。

「行つてきます」

「行つてらっしゃい」

私たちの約束は果たされなかった。

帰る途中、車で事故に遭い、3人とも死んでしまったのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6528e/>

° ?) の忘れられない恋物語のようです

2010年10月15日23時43分発行